

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association between gestational age at threatened preterm birth diagnosis and incidence of preterm birth: the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

切迫早産の診断時期と早産発症の関連

ユニットセンター(UC)等名: 福島ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Scientific Reports

年: 2023 DOI: 10.1038/s41598-023-38524-9

筆頭著者名: 村田 強志

所属 UC 名: 福島ユニットセンター

目的:

切迫早産は、規則的な子宮収縮や子宮頸管長の短縮により、早産が差し迫っていると考えられる状態です。しかし、切迫早産の中でも、どのような特徴を有する場合に早産の可能性がより高くなるのかはよく分かっておりません。本研究では切迫早産の診断週数と早産の発症との関連を調べました。

方法:

エコチル調査に参加した妊婦及び生まれた子どものデータから、22週以降に分娩となった症例を対象とし、切迫早産と診断された週数を収集し、22-24週、25-27週、28-30週、31-33週、34-36週に区分しました。それぞれの集団の37週未満、34週未満の早産発症との関連について統計解析を行いました。さらに、人工的な早産の原因となりやすい妊娠高血圧症候群、在胎不当過小児(出生時の週数に比して出生体重が基準よりも低いもの)、常位胎盤早期剥離、高血圧症の症例を除外し、同様に解析を行いました。解析時に、妊婦の年齢や体格、喫煙や学歴、収入といった妊婦の社会的な背景因子を考慮しました。

結果:

94,236人の妊婦について解析を行いました。切迫早産の診断を受けていない妊婦と比較して、いずれの診断週数においても、切迫早産の診断を受けている妊婦では早産の頻度が有意に高い結果でした。初産婦、早産既往のない経産婦、早産既往のある経産婦に集団をわけて解析を行うと、37週未満の早産では、34-36週に切迫早産と診断された初産婦と34-36週に切迫早産と診断された早産既往のない経産婦で調整オッズ比が最も高くなりました。34週未満の早産では、22-24週に切迫早産と診断された経産婦で調整オッズ比が最も高くなりました。

考察(研究の限界を含める):

切迫早産の診断週数と早産の発症との関連は、妊婦が初産婦か経産婦かおよび着目する早産が37週未満か34週未満かによって変動する結果でした。37週未満の早産と34週未満の早産では早産を引き起こす主な原因が異なる可能性や日本における切迫早産の診断が他国と異なり、他国と比較して多くの妊婦を切迫早産と診断している可能性が考えられます。しかし、本研究では、細かい臨床的な状況が考慮されておらず、研究としての限界もあり、切迫早産の診断週数と早産の発症との関連についてはさらなる研究が必要です。

結論:

切迫早産の診断週数と早産の発症との関連は初産婦経産婦の別や着目する早産の週数により異なる結果であり、切迫早産の診断週数と早産の発症との関連が臨床上にどのように活かせるかは不明です。本研究には研究としての限界もあるので、注意深い解釈が必要です。切迫早産の診断週数と早産の発症との関連についてはさらなる研究が必要です。